

# マイノリティ環境にあるカナダ・フランコフォンの アイデンティティ形成

小松 祐子

カナダにおけるフランコフォン（仏語系住民）の言説には「アイデンティティ」ということばが多用される。2008年7月にケベック市で開催された国際フランス語教授連合（FIFP）世界大会の大会テーマが「*Faire vivre les identités francophones*」（フランコフォン・アイデンティティを活性化する）であったことは、大会の現地主催者の「アイデンティティ」へのこだわりを示す一例と言えよう。フランス語教育がアイデンティティと直結しているという問題意識は、他国のフランス語関係者においては比較的少ないように思われるからである。

英語への言語文化的な同化の脅威にさらされてきたカナダのフランコフォンにとって、フランコフォンであることについての自己認識とその肯定がきわめて重要な課題であり続けている。とりわけマイノリティ環境にあるカナダ・フランコフォンの教育関係者のあいだでは、2000年代以降にアイデンティティ形成の問題についての議論が活発化し、理論的基盤が検討されるとともに、さまざまな実践が展開されている（Bourdreau 2006, p.7）。

そこで本稿では、まず前半において、カナダのマイノリティ環境にあるフランコフォンにとってアイデンティティ形成が課題となる背景を、歴史と現状の両面から確認する。後半では、アイデンティティ形成に関する教育上の施策やその理論的枠組みと教育指針を検討し、アイデンティティ形成教育が目指すところを探る。

## 1. カナダにおけるフランコフォン・アイデンティティの歴史の変遷<sup>1</sup>

カナダのフランス語系住民の起源は17世紀初頭<sup>2</sup>に開始されたフランス人入植にさかのぼる。入植者とその子孫が用いた「カナダ人（カナイヤン）」という自称は、フランス人に対比されるものであった。

新大陸内部へと拡大された広大なフランス植民地は、1763年のパリ条約により英国へと譲渡された。以降、新たにやってきた英系住民との対比からフランス語系住民の自称は「仏系カナダ人」へと変化した。英国支配下の抑圧的状况を生きる仏系カナダ人は、フランス語とカトリック信仰を主な要素とする仏系としての自らのアイデンティティについての意識を強め、共同体としての絆を深めることで、文化的な生き残りを図ったのである。

19世紀後半以降は、セントローレンス川流域（現在のケベック州）に集住していた仏系カナダ人の多数が主に経済的理由からカナダ西部や米国北部へ移住した。彼らは自分たちのアイデンティティの要素を守るため、移住先で制度的なネットワーク、とくに学校と教会を整備していった。共同体内外の絆が存在し、北米全土に散らばるフランコフォンの多くが血縁を有するケベック州がネットワークの中心を成していた。

19世紀後半から20世紀前半には、英系中心の「ネイション・ビルディング」運動を背景とした連邦政府や各州政府の同化政策により、多くの州でフランス語での教育が禁止または制限された。これに対し仏系

カナダのナショナリズムは高まり、カナダ全土、更には北米全土にわたる組織設立や集会開催を通じて、フランス語を基盤とするアイデンティティが肯定された。

しかし1960年代に入り、ケベック州において主権分離構想へと発展するネオ・ナショナリズムが高まると、同州フランコフォンたちは「仏系カナダ」を脱し「ケベック人」という新たな自己規定を持つに至った。仏系カナダの中心的役割を果たしていたケベックの離脱に大きく失望した他州のマイノリティ・フランコフォンらは、州ごとのフランコフォン・アイデンティティを模索し、組織化を進めた。彼らの自己規定は仏系オンタリオ人、仏系マニトバ人など領土的なものへと変わっていったのである。さらにケベック州外各地のフランコフォン組織は1975年には「ケベック以外のフランコフォン連盟 (Fédération des francophones hors-Québec)<sup>3</sup>」として連合した。

こうしていったんは引き裂かれたケベック州と他州のフランコフォン連帯の道であるが、近年では再び新たな協力の道が模索されている (小松 2017)。ケベック州においても他州においても、共通の記憶とフランス語に支えられた集団意識があることに変わりはなく、英語による抑圧の歴史を経て鍛えられたフランス語への強い愛着と共同体としてのアイデンティティが存在する。

近年では移民の流入により、フランコフォン共同体内部にも民族文化的な多様性が増しており、「仏系」という民族性ではなく、言語を基盤とした「仏語系 (フランコフォン)」というアイデンティティのもとに多様な文化の包摂が目指されている。

## 2. カナダにおけるマイノリティ・フランコフォンの現状と課題

### 2.1. 人口割合の減少

カナダにおいてフランス語を母語とする者は全体の21.4%であるが、その大部分はケベック州 (79.1%) に集住し、他州においては3.8%にとどまる。フランス語を第一公用語とする者 (第三言語母語者を含む) については、カナダ全体で22.8%、ケベック州で85.6%、他州は4%である (Statistique Canada 2017, p.4-5)。

フランス語母語者およびフランス語第一公用語者の実数自体は微増しているのであるが、カナダ全体の人口増加に追い付かず、結果としてその割合は年々減少している。ケベック州外のマイノリティ環境のフランス語母語者の割合は、過去50年間に1971年の6.1%から、1981年5.1%、1991年4.8%、2001年4.4%、2011年4.0%と漸減している<sup>4</sup>。この割合は2036年には3%にまで減少することが予想されている (Houle & Corbeil 2017)。

言語グループ人口動態の変化要因には、自然増減 (出生から死亡を差し引いたもの)、国内移住、国際移住、言語間移動 (世代間・世代内) があるとされる (*ibid.*, p.35)。

### 2.2. 言語継承の課題

ケベック州外フランコフォンの出生率は1.65と低く、高齢化が加速している (*ibid.*)。世代間言語継承率は0.7前後で推移しているが、近年わずかながらも改善傾向が見られ、2011年には0.79である。つまり100人のフランコフォンの母親からフランス語を受け継ぐ子どもは79人であり、残りの21人が他の言語 (英語) を選択していることになる (*ibid.*, p.37)。

マイノリティ・フランコフォンにとくに指摘されるのは、フランス語母語者と英語母語者または第三言

語母語者とのあいだの異言語間カップルが多いことである<sup>5</sup>。Bernard (1995) は、マイノリティ環境のフランコフォンの異言語間結婚が1960年代以降急増し、英語化と文化的同化をもたらしていることを指摘している<sup>6</sup>。2011年の国勢調査をもとにVézina & Houle (2014) が行った分析によれば、フランス語母語者同士のカップルでは子どもの91.1%がフランス語を継承するのに対して、異言語カップルでは29.1%しか継承されない (p.415)。

### 2.3. 高いバイリンガル率と言語不安

カナダではフランコフォン・マイノリティが集住する地域および異言語間カップルの子どもの英仏バイリンガル率が高いことが知られている (Martin 2019)。ケベック州外のカナダでは、フランス語母語者の若者 (5-17歳) のバイリンガル率は93%に上る。これに対し、英語母語者では12%、第三言語母語者で英仏両言語を使える者は13%である (カナダ全体のバイリンガル率は26.9%)。バイリンガルは英語への同化の一過程であると考えられことが多く、言語シフトの可能性が指摘される。

また言語不安の問題も言語シフトを促す要因となることが指摘されている。カナダ各地で話されるフランス語には発音、語彙、統語に地域的な特徴があり、フランスのフランス語と大きく異なるだけでなく、カナダ国内で標準とみなされるケベック州のフランス語とも異なっている (Valdam, Auger & Piston-Hatlen 2005)。これらのフランス語の地域変種話者は、地域外のフランコフォンとの接触において劣等感をもつばかりでなく、日常的に学校内で「標準フランス語」との違いを指摘されるために、自己評価を低くし言語に不安をもつ者が少なくない。母語であるフランス語に自信を持ってないがゆえに、あえて英語の使用を選ぶ場面も少なくないと言う。このような言語不安が英語への言語的同化を進める原因の一つであることは、オンタリオ州フランコフォン青年連盟 (FESFO) の調査報告書<sup>7</sup>にも示され、社会・文化活動の基盤となる言語に不安をもつことは、とくに若者の人格やアイデンティティの形成に大きな影響を与えるため、言語的多様性を認めることの重要性が説かれている (FESFO 2014)。

### 2.4. 民族文化的多様性の課題

積極的な移民受け入れ政策<sup>8</sup>を展開するカナダにおいて、フランコフォン共同体の構成にも重大な変化が起こっている。人口衰退の兆候が認められるフランコフォン共同体において、フランコフォンの新規移民の受け入れは必須である。カナダ政府はマイノリティ環境にある公用語コミュニティの活力を保つための移民政策「2018-2023年公用語アクションプラン」を実施している。ケベック州外フランコフォンの現在の割合 (約4%)を保つため、フランス語系移民の受け入れを全体の4.4%とする目標を掲げ、このための各種措置に4千万ドル以上を計上している。

しかし伝統的に高い文化的同質性を特徴としてきたフランコフォン共同体において、多文化共生と社会統合の課題は大きい。「マイノリティ・フランコフォンの共同体は、過去の苦難の歴史のなかで培われた固い団結をもち、言語、文化、宗教がその帰属と深く結びついているために、多元性が根付くことは他の場所においてよりも困難である。」 (ACELF 2008, p.7)

そこで必要とされるのが、共同体アイデンティティの再定義である。過去の記憶に閉じこもるのではなく、開かれた態度で多様性をポジティブに受け止め、価値とアイデンティティの共有によって新たな共同体の歴史を創っていくことが求められている。そのためには、共同体構成員各人のアイデンティティの確立が前提となる。

### 3. アイデンティティ形成のための教育

#### 3.1. マイノリティ・フランコフォンの教育

カナダのマイノリティ・フランコフォンにフランス語での教育の権利が認められたのは、ようやく1982年のカナダ憲章23条（少数派言語教育権の保障）によってである。23条制定後も各州政府はフランス語学校の設置に消極的態度をとり続け、現在まで各地で訴訟が繰り返されている。もっとも新しいところでは2020年6月にブリティッシュ・コロンビア州政府に対し、英語学校と同等の人数比と設備をもつフランス語学校を設置することを求めて、同州フランス語保護者連盟とフランス語教育委員会が続けてきた訴訟にカナダ最高裁判所の判決が下り<sup>9</sup>、フランス語側が勝訴したことは、カナダ全国のマイノリティ・フランコフォンを勇気づけた。この判決を受けてバンクーバー周辺に新たにフランス語学校6校を開設することが州政府に求められている<sup>10</sup>。

20世紀を通じ、マイノリティ環境のフランコフォンにとっては、フランス語学校が存在しフランス語での教育が受けられるかどうかの問題だったのであり、教育内容の検討が始まったのは最近のことである。全国フランス語教育委員会連盟（Fédération nationale des conseils scolaires francophones : FNCSF<sup>11</sup>）が2005年に開催した教育サミット（Sommet sur l'éducation）では、カナダ憲章23条の実現が中心テーマとして取り上げられた。次いで2012年の第2回教育サミットにおいて、各地の教育委員会<sup>12</sup>、各州・準州教育省、連邦政府の三者協力のもとでマイノリティ・フランコフォン教育の内容を整備することが決定され、「フランス語教育戦略計画（Le Plan stratégique sur l'éducation en langue française : PSÉLF）」が策定された<sup>13</sup>。その3つの柱が1）教授法、2）アイデンティティ形成、3）文化多様性である<sup>14</sup>。

#### 3.2. マイノリティ・フランコフォン教育のためのリソース

カナダにおいて教育は各州・準州の管轄事項であり、連邦政府に教育省は存在せず、全国的に統合された教育制度はない。しかし、初中等教育の実施に関する各州間の情報交換や相互協力を円滑にすることを目的として「カナダ教育閣僚協議会（Conseil des ministres de l'Éducation : CMEC）」が設置されている。CMECは、連邦政府とのあいだにマイノリティ環境での公用語教育に関する協定書を交わし、複数年にわたる教育プランを提示することにより国から各州への教育予算の割当てを受けている<sup>15</sup>。2004年からはこのCMECにより、「第一言語としてのフランス語コンソーシアム委員会（Comité du Consortium du français langue première : CCFLP）」が設置され、マイノリティ環境にあるフランコフォンの教育改善のための施策が実行されている。CCFLPは学校指導者向けのガイドとして「フランス語教育研修ツール集」（2004）、「読み・書きの認知・メタ認知ストラテジーに関する研修ツール集」（2008）を作成し、さらに2020年春からはインターネット・ポータル「カナダでフランス語で教える<sup>16</sup>」を開設した。このポータルには、マイノリティ環境でのフランス語での学習・教育の特性と必要を考慮した教員向け自己研修用リソース2種が公開されている。一つが生徒の言語コミュニケーション能力を向上させるための教授法資料「COMMUNICO」であり、もう一つが生徒のアイデンティティ形成支援を含む文化的指導のための資料「教育の文化的アプローチ（l'Approche culturelle de l'enseignement）」である。理論的基盤に関する解説文書から教育活動の実践例を紹介する動画に至るまで豊富なリソースが提供されている。

### 3.3. 「教育の文化的アプローチ」

ここで注目するのはとくに後者の「教育の文化的アプローチ」である。このリソース提供の目標は以下のように説明されている。『教育の文化的アプローチ』は生徒たちがフランコフォン文化と接触し、その接触を保つことを可能にします。そのために、就学期を通じて、とくにインターネットによる媒介を十分に活用し、フランス語での文化実践の可能性を彼らに与えます。教育活動の中心に文化的関心を置くことにより、『教育の文化的アプローチ』は生徒の学業の成功を促進し、アイデンティティ形成に寄与します<sup>17</sup>。』

学校教育の使命はフランス語の言語能力開発や各教科内容を習得させることにとどまらず、文化的側面からのアイデンティティ形成に及ぶことが強く意識されていることがわかる。言語文化的にマイノリティ環境にある生徒たちの余暇活動は周囲の環境や若者文化の流行の影響により英語で行われることが多く、これが彼らをフランス語から遠ざける原因の一つであると考えられている (Dallaire & Roma 2003)。そこで、学校教育において、とくにインターネットを利用したフランス語での文化活動を促進することにより、フランコフォンとしてのアイデンティティ育成が目指されているのである。

### 3.4. 言語教育とアイデンティティ形成

アイデンティティ形成が言語教育と関連付けて検討されることについて、カナダでは国語としての英語教育にアイデンティティ形成が含まれることを、近藤 (2009) が1960～80年代のオンタリオ州の国語 (英語) 教育カリキュラム分析を通じて明らかにしている。カナダが英国から自立していくなかで、カナダ独自のアイデンティティが隣国アメリカとの関係をもとに模索されていった。国民の大多数が言語を共有するアメリカとの文化的境界は曖昧であり、とくにアメリカ・メディアの影響がカナダ人独自のアイデンティティ形成を妨げるという危機感が存在した。そこで、カナダ独自の文化を奨励し発展させる方法を検討する政府調査委員会が1949年に設立され、その成果である「マッセイ報告書」(1951) では、アイデンティティ形成の方法としてメディアの利用と批判能力育成の重要性が指摘された。これがその後カナダで大きく発展したメディア・リテラシー教育の原点であったことが指摘される。そしてこのアイデンティティ形成思想に基づくメディア・リテラシー教育は、国語としての英語科のカリキュラムに組み込まれていたのである。

マイノリティ環境でのフランス語教育も、このようなカナダのアイデンティティ形成の教育的伝統のなかに位置づけられるものであり、アイデンティティ形成はメディア・リテラシーと深く結びついて考えられていることから、「教育の文化的アプローチ」においてもインターネットの利用に強調が置かれているものと理解される。「教育の文化的アプローチ」の理論基盤文書には、インターネットがとくに英語で発達してきたことを理由に、フランス語でこれを使いこなすことの重要性が説かれている。

### 3.5. 「全カナダ文化参照物資料集」

「教育の文化的アプローチ」には、付属資料として「全カナダ文化参照物バンク (Banque pancanadienne des référents culturels)」と名付けられたデータベースが提供されている<sup>18</sup>。その紹介文は以下のとおりである。

「全カナダ文化参照物バンクは、カナダのフランス語学校での『教育の文化的アプローチ』の実行を促進するために作られました。(中略) 生徒の文化的アイデンティティ形成とカナダ・フランス語共同体の活力に特に寄与する文化的要素が収録されています。」

以下のような注意書きも添えられている。

「この『フランス語にとって意味のある全カナダ文化参照物バンク』は、カナダのフランス語共同体に影響があり、フランス語共同体の特徴を表している参照物のすべてを網羅しているわけではありません。この資料集は、持続可能な発展、連帯、文化多様性促進という展望に基づき、フランス語共同体を価値づけ、活気づけるための道具となることを目指しています。」(下線は筆者による)

公式タイトルにはない「フランス語にとって意味のある」という語が注意書きのなかには追加されている。「全カナダ」と名付けられるものの、実際にはフランコフォンのためのデータベースであり、フランス語話者の観点から見て意味をもつ、フランス語の価値づけに役立つ文化的参照物が掲載されていることがわかる。データベースへは教員アカウントによるログインを要するため具体的内容は確認できないが、フランス語圏カナダの文化的な参照物として、歴史的人物や事件、文学・映画・芸術作品の情報などが収録されているものと想像される。

「教育の文化的アプローチ」では、このような参照物をもとに、教科を問わず、カナダ・フランコフォンの文化的要素を取り入れた教育実践を行うことが推奨されている。たとえば実践例として、理科の音の実験で、カナダ・フランコフォンに伝わる童謡のメロディーを使う授業風景の動画が紹介されている。このような実践の意義は以下のように説明される。

「生徒がフランコフォンの集団的な文化を習得し、文化的指標を獲得し、さらにはさまざまな活動領域においてこの集団に参加したいという志向をもつように促すことが重要です。学校は、言語文化の差異や、文化的遺産といった概念に結び付く諸テーマとならび、文化的豊かさの源としての多様性について意見を交換し、考察する機会を与えます。」

カナダにおけるフランコフォン文化の具体的な参照物が、若者自身の文化的指標のなかに組み込まれることで、フランコフォンとしてのアイデンティティが形成され、共同体の一員が育つことが期待されているのである。また、ここではフランコフォンのあいだの差異や多様性についての考察が重視されていることにも留意しておきたい。

### 3.6. 「教育の文化的アプローチ」の理論的基盤

「教育の文化的アプローチ」の理論的基盤とされているのが、2012年にカナダ教育閣僚協議会 (CMEC) とカナダ連邦文化遺産省とにより策定された「フランス語学校における文化習得のための全カナダ・フレームワーク (Cadre pancanadien pour l'appropriation de la culture dans les écoles de langue française)」である。この文書によれば、「教育の文化的アプローチ」の取組みの元となったのは、2000年ごろからオンタリオ州で展開されたフランコフォンの文化的参照物を取り入れた教育実践であり、2004年オンタリオ州教育省による「フランス語教育のためのオンタリオ州言語整備政策 (Politique d'aménagement linguistique de l'Ontario pour l'éducation en langue française : PAL)」に文化的アプローチが組み込まれた。2009年には「オンタリオ州フランス語学校における教育の文化的アプローチ (Une approche culturelle de l'enseignement pour l'appropriation de la culture dans les écoles de langue française de l'Ontario)」にその指針がまとめられた。

他方、アイデンティティの形成については、2006年にカナダ・フランス語教育協会 (Association canadienne d'éducation de langue française : ACELF) が発表した「アイデンティティ形成指導フレームワーク (Cadre d'orientation en construction identitaire)」に示された枠組みが参照されている。ACELFはカナダ各州教育省やフランス語教育関係の各種団体と協力して活動を行う非営利組織<sup>19</sup>で、「フランコフォン共同体の活力を強化するために教育分野においてリーダーシップを発揮すること」をその使

命とし、活動の柱として、1)フランコフォン・アイデンティティ構築を目指した教材・教育ガイドの作成と配布、2)教育関係者の能力強化(研修事業)、3)インクルーシブな文化促進を目指した教材・教育ガイドの作成と配布が挙げられる。全国大会の定期開催、研究誌の編纂と公開を行っている。2019-2020年活動報告によれば全国のフランス語初中等教育機関の教員の46%が会員として加盟している<sup>20</sup>。

### 3.7. 「アイデンティティ形成指導フレームワーク」：構築主義

ここではとくに、このACELFによる「アイデンティティ形成指導フレームワーク<sup>21</sup>」に注目したい。この資料は、すでに見た「教育の文化的アプローチ」や「フランス語教育戦略計画PSÉLF」など、カナダのマイノリティ環境でのフランス語教育にかかわる諸機関・団体が行う施策のほぼすべてにおいて理論的フレームワークとして参照されている<sup>22</sup>。

このフレームワークは、個人により理解の差が大きいアイデンティティ形成という複雑な問題について、一貫性のあるビジョンを提示し、関係者間で共有することを目的として作成されており、アイデンティティ形成の概念的枠組みを示し、教育の場での支援や介入のための基盤となるものである。マイノリティ環境にある若者が言語に対して持つ関係や表象、異言語間結婚や複数民族環境などの特性を考慮に入れ、関係者間に対話を導くものとして企画されている。

ACELFが提示するアイデンティティ形成の定義はきわめて抽象的なものである。

「アイデンティティ形成は高度に動的なプロセスである。人はこのプロセスを通じて、自分が成長する社会的コンテクストと自然環境のなかで、いかに考え、行動し、欲するかによって、自己を定義し認識する。」(ACELF 2006, p.11)

この定義は、フランコフォンだけでなく人類のいかなるアイデンティティ形成にも当てはまるものとして意図的に開かれたものとされており、民族的な均質性にも多様性にも適用可能なものとして提示されている。ここでとくに重要であるのは、この定義が本質主義を遠ざけるきわめて構築主義的な考え方に基づいているということである。個人的なプロセスとしてアイデンティティ形成をとらえ、集団(カテゴリー)の固定的なアイデンティティを前提とするものではない。また個人を主体とし、社会的コンテクストや自然環境といった個人を取り巻くものとの関係性のなかで、思考、行動、欲望という個人の相互に関連しあう活動・経験を通じ実現される動的な営みとしてアイデンティティ形成が考えられている。

このようにきわめて一般化された定義が提示されているものの、ACELFおよびカナダ・フランコフォン諸機関・団体が目指すところはフランコフォンとしての自己認識をもち、それを肯定する若者を育てることであることは自明である。アイデンティティについて、ACELFでは次のように解説している。

「アイデンティティによって人や集団は他と区別される。実際、各人は複数のアイデンティティの層をもち、それらがその人を定義するが、それらは状況や時によって変化する。職業、家族、ジェンダー、宗教、政治、民族にかかわるさまざまなアイデンティティがある。(中略)フランス語学校は学業の成功だけでなく、生徒それぞれの個人的で社会的な発展に関心をもつべきであり、生徒がアイデンティティを形成しフランコフォンとして自己を定義し認識するための手助けをすることが大切である<sup>23</sup>。」(下線は筆者による)

アイデンティティの本来的な可変性と多元性・重層性を認めつつも、生徒のアイデンティティ形成において、折り重なるアイデンティティ要素の総体のなかで、とくに「フランコフォン」という自己認識を強化することが望まれており、学校がそのための役割を果たすべきであるとしている。

このような考えに基づき、ACELFは学校現場でのアイデンティティ形成教育の実践を支援するため

の多数のリソースと研修の機会を提供している。教育対象者の年代別（幼年期、学童期、思春期、成人期）にきめ細かな資料が用意され、教育関係者向けだけでなく、保護者や生徒自身の自己啓発のための資料、ワークブック（教材・自己点検チェックシート）が提供され、それらに基づくワークショップ、研修会も開催されている。

### 3. 8. 「アイデンティティ形成教育の指針」：正統的周辺参加の考え方

ACELFは12冊からなる詳しい解説資料「アイデンティティ形成を理解する（Comprendre la construction identitaire）」を作成し、HPでも公開している<sup>24</sup>。この第4冊目に示されたアイデンティティ形成教育のための「8の指針<sup>25</sup>」について確認してみたい。

1. 現代のフランコフォニーのなかに位置取りする
2. 創造性と革新に賭ける
3. 多様性を価値づける
4. 家族、コミュニティ、学校の協調した活動を促進する
5. フランス語に対するポジティブな関係を育てる
6. フランコフォニー内の絆をつくる
7. 動員を奨励する
8. 持続可能な効果を目指す

このなかの「フランコフォニー」とは多義性のある語のためとくに注意が必要である。フランス語話者を意味する「フランコフォン」の名詞形であるこの語は、まず第一義には「フランス語を話すこと」であるが、それをもとに「フランス語を話す人の集団、広がり」、つまりフランス語コミュニティや仏語圏地域・世界を指すばかりでなく、「フランス語話者にかかわる諸制度、諸機関」へと意味が拡大される。さらには「フランス語話者が共有する精神的価値」を含意して用いられる場合もある（Deniau 2003）。ACELFのこの指針においてもフランコフォニーという語をこれらの多義性をもって理解することが大切である。

教育を学校だけの取組みと見なさず家庭や地域社会との連携が重視されること（指針4）に特段の新しいさはないかもしれないが、フランコフォン・アイデンティティの形成においては、コミュニティや地域を超えた全国的さらには国際的なフランコフォニーとの連携や絆が意図されることが重要である（指針6）。とりわけマイノリティ環境にあるフランコフォンの場合、自分の周囲を見るだけではわからない、フランコフォン共同体の広がりや可能性を知ることが、自己の言語文化的アイデンティティを肯定し、発展させていくための重要な足がかりとなるからである。

そこで大切なのが指針7に挙げられた「動員（mobilisation）」である。この語は日本語では単独で使用せず、「観客を動員する」「戦争への動員」のように何らかの目的や対象とともに用いられるが、「人や物を集め動かすこと」を意味する。フランコフォンのアイデンティティ形成教育においては、この「動員」が重視される。ACELFが提供する教材や資料においてはイベント（とくに地域のフランコフォンの祭り）への参加や運営の手伝い、ボランティア事業（たとえば新規移民相談センターでの業務）への参加がしばしば提案されている<sup>26</sup>。

このような提案には学習理論として近年重視される正統的周辺参加論の反映を見ることができるのではないだろうか。レイヴ&ウェンガー（1993）による正統的周辺参加論では、「人が実践の共同体に参加することによってその共同体の成員としてのアイデンティティを形成すること」を「学習」とみなす（佐伯2014, p.46）。正規成員としての周辺的な位置からはじめて徐々に参加度を増していくような「共同体へ



の参加」そのものが「学習」であると捉えられるのであり、学習者は共同体の中で自分がどのような位置にいるのかを理解することで、自分が何者であるのかについての認識を形成し変化させ、アイデンティティを確立していくことになる。アイデンティティ形成は個人のみで達成されるものではなく、「状況に組み込まれた学習」を要するのである。

そして、もう一つ重要であるのは、学習者と他の共同体成員との間の相互交渉は、学習者のみに影響するものではないということである。学習者が参加することが共同体を変化させ、また学習者自身の変化や参加者が入れ替わることも共同体への変化を生むと考えられる。参加者の学びが共同体に新しい発想や価値をもたらし、その発展に繋がるのであり、個人のアイデンティティの確立は集団アイデンティティへ還元される。相互構成的関係を通じて、個人にとっても共同体にとってもアイデンティティの形成と更新が実現されると言えよう。したがってこのような共同体活動へ個人を「動員」することが、フランコフォン共同体の持続と発展のカギとなるのである。

#### 4. 結びとして

マイノリティ環境にあるフランコフォンは、同化の脅威にさらされてきたがゆえに、自らの言語文化アイデンティティに対する深いこだわりと強い共同体意識を持つ。高い民族的同質性に支えられてきたフランコフォン共同体は、近年、移民受入れの増加に伴う文化多様性の包摂という新たな課題を抱えている。集団的アイデンティティの更新は、構成員それぞれのアイデンティティ形成によってなされるものであり、若者がフランコフォンとしてのアイデンティティを確立させることが同化の脅威を遠ざけ、共同体の持続につながることを期待される。

そのような事情を受けて、マイノリティ環境におけるフランス語学校ではアイデンティティ形成のための熱心な教育的取組みが展開されている。その枠組みは構築主義の考え方にに基づき、正統的周辺参加が推進されていることが理解される。集団的記憶を大切にしながらも、差異をリスペクトし、個人を主体とした開かれたアイデンティティの構築が目指されている。アイデンティティにかかわる教育を学校教育の使命として位置づけるだけでなく、共同体が学びの場となり、共同体自体の更新との相互構築的な関係の実現が目指されている。また、関係諸機関・団体の連携や、地域外のフランコフォニー世界との絆も重視されている。カナダが言語教育、メディア・リテラシー教育の先進国であることはすでに知られているが、アイデンティティ形成教育に関しても学ぶところがあるのではないだろうか。今回はアイデンティティ形成教育の背景や枠組みを確認するとどまったが、今後は指導の具体的方法や内容についても検討していきたい。

※本研究は科研費20K12368の助成を受けたものである。

#### 注

- 1 歴史的変遷について詳しくはマルテル（2015）、小松（2017）を参照。
- 2 1604年からアカディ、1608年からケベックへの入植が開始された。
- 3 この組織名称は、その後1991年に「フランコフォンおよびアカディアン共同体連盟（Fédération des communautés francophones et acadienne : FCFA）」と改められた。またFCFAは1988年からはケベック市内に事務所を開設し、ケベック州政府との関係改善を模索している。

- 4 カナダ統計局の以下の表から50年間の推移の数字を引用した。 <https://www.canada.ca/content/dam/pch/documents/services/official-languages-bilingualism/publications/lo-ol-stats-fr.pdf>
- 5 例として、プリンスエドワード島州における仏語話者と英語話者とのカップルの率は1971年の42%から2006年には71%へと増加している。これに対し、仏仏カップルの割合は1971年の57%から2006年には27%へと減少し、第3言語話者とのカップルが0.7%から1.6%に増えている。 <https://www150.statcan.gc.ca/n1/pub/89-642-x/2012010/article/section3-fra.htm#a1>
- 6 1960年代には、都市化、核家族化、脱宗教の急激な進行により仏系カナダ人の伝統的価値観に大きな変化が生じた。とくにかつて仏系カナダのアイデンティティの基盤であったカトリック信仰が薄れたことが、宗派の異なる英語話者との結婚が急増した原因とされている。
- 7 2014年にカナダの遺産・公用語省の助成を受け調査が実施された。
- 8 カナダ政府は2019-2021年の移民受入レベルプランを発表しており、2021年の移民受入数の目標を、カナダの人口のほぼ1%にあたる35万人としている。2019年の受け入れ実績は34万人であった。
- 9 カナダ最高裁判所Cour suprême du Canada判決文： <https://decisions.scc-csc.ca/scc-csc/news/fr/item/6883/index.do>
- 10 カナダ・マイノリティ環境にあるフランス語学校数については以下を参照。  
<https://www.acef.ca/media/outils-pedagogiques/carteVFC-2019.pdf>  
学校数は699校、生徒数は約16万人に上る。
- 11 1990年設立。
- 12 ケベック州外のフランス語教育委員会は28存在し、FNCSFに加盟している。
- 13 このサミットには後述するACELFも参加し、パートナー団体として協定書に調印している。
- 14 このPSÉLFにおけるアイデンティティ形成においても、後述するACELFのフレームワークが参照されている。 <https://pself.ca/a-propos/>  
なお、全国フランス語教育委員会連盟が2016年に行った調査によれば、アイデンティティ形成について教育機関の年間計画や年間報告書などの公的文書に言及される割合は62%にとどまるが、教員の89%がアイデンティティ形成を目指した活動を教育に取り入れている。Document d'appui : Présentation détaillée des données, Portrait de la mise en œuvre du Plan stratégique sur l'éducation en langue française (PSÉLF), p.15. [https://pself.ca/wp-content/uploads/2016/09/CLE\\_portrait\\_analytique\\_Doc\\_appui\\_FNCSF\\_Vd%C3%A9finitive\\_20mars2016.pdf](https://pself.ca/wp-content/uploads/2016/09/CLE_portrait_analytique_Doc_appui_FNCSF_Vd%C3%A9finitive_20mars2016.pdf)
- 15 « Protocole d'entente relatif à l'enseignement dans la langue de la minorité et à l'enseignement de la langue seconde » : [https://www.cmec.ca/docs/programsInitiatives/olp/protocol/Protocol\\_2019-2023-FR.pdf](https://www.cmec.ca/docs/programsInitiatives/olp/protocol/Protocol_2019-2023-FR.pdf)
- 16 « J'enseigne en français au Canada » : <http://jenseigne-en-francais.ca/>
- 17 <http://approcheculturelle.ca/index.php/affiche/publique/cmecpres7>
- 18 <https://referentsculturels.com/>
- 19 1947年設立。
- 20 <http://www.acef.ca/>
- 21 アイデンティティ形成の定義と枠組みについて、研究者グループによる検討が2003年に開始され、作業の成果は2006年にACELF理事会にて承認され公開された。
- 22 「アイデンティティとその形成プロセスは複雑な概念であるが、研究者や実践者、そして何よりもACELFによってなされてきた業績により、フランコフォンのネットワーク全体が、アイデンティティ形成について共通の理解とビジョンを共有できている。」 *Bilan des démarches et des réalisations du Plan stratégique sur l'éducation en langue française* (PSÉLF報告書)、p.28。
- 23 ACELF "Construction identitaire : le modèle", <https://www.acef.ca/construction-identitaire/default.php>
- 24 <https://www.acef.ca/ressources/serie-comprendre.php>
- 25 フランス語原文は以下のとおり：Les 8 principes directeurs / 1) S'inscrire dans la francophonie contemporaine / 2) Miser sur la créativité et l'innovation / 3) Valoriser la divers / 4) Favoriser l'action

concertée de la famille, de la communauté et de l'école / 5) Développer un rapport positif à la langue française / 6) Créer des liens au sein de la francophonie / 7) Encourager la mobilisation / 8) Viser des effets durables. <https://www.acef.ca/media/outils-pedagogiques/Ressources-CCI-Numero4-Principes-web.pdf>

この「8の指針」については以下の教材も存在する。≪ 8 principes... et c'est parti ! Milieu scolaire ≫ (16p.) / ≪ 8 principes... et c'est parti ! Petite enfance ≫ (16p.), <https://www.acef.ca/ressources/guide-8principes.php>

- 26 13-18歳向け教材「フランス語での私の生活Ma vie en français」(52p.)  
<https://www.acef.ca/ressources/ma-vie-en-francais.php>

#### 【参考文献】

- 小松祐子 (2017) 「ケベックとカナダ他州フランコフォン共同体との関係」『ケベック研究』(日本ケベック学会) 第9号, 46-58頁。
- 近藤聡 (2009) 「カナダの国語科におけるメディア・リテラシー教育の発祥(1950～80年代): カナダ社会の『アイデンティティ形成思想』とメディア概念の変容」『国語科教育』65巻, 35-42頁。
- 佐伯胖 (2014) 「そもそも『学ぶ』とはどういうことか: 正統的周辺参加論の前と後」『組織科学』Vol.48 No. 2, 8-49頁。
- ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー (佐伯胖訳) (1993) 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書。
- マルセル・マルテル (小松祐子訳) (2015) 「ケベックとフランコフォンの少数派共同体との奇妙な関係—歴史的観点から」『ケベック研究』(日本ケベック学会) 第7号, 3-15頁。
- Allard, R. (2002), Résistance(s) en milieu francophone minoritaire au Canada. Exploration théorique et analyse du phénomène à partir du vécu langagier et du développement psycholangagier, *Francophonies d'Amérique*, no13, pp.7-29.
- Association Canadienne d'Éducation de Langue Française (ACELF) (2006), *Cadre d'orientation en construction identitaire*. [https://www.acef.ca/c/fichiers/ACELF\\_Cadre-orientation.pdf](https://www.acef.ca/c/fichiers/ACELF_Cadre-orientation.pdf)
- Association Canadienne d'Éducation de Langue Française (ACELF) (2008), *Réflexion sur la diversité culturelle au sein des écoles francophones du Canada*. [https://www.acef.ca/c/fichiers/ACELF\\_Reflexion-diversite-culturelle.pdf](https://www.acef.ca/c/fichiers/ACELF_Reflexion-diversite-culturelle.pdf)
- Bernard, R. (1995), Langue maternelle et langue d'usage dans les foyers mixtes francophones : les enjeux de l'exogamie, *Cahiers Charlevoix*, 1, pp.241-289.
- Boudreau, G. C. (2006), Pour ouvrir un dialogue et élaborer ensemble notre vision, dans l'ACELF, *Cadre d'orientation en construction identitaire*, pp.7-9.
- Conseil des ministres de l'éducation du Canada (2012), *Document de fondements pour une approche culturelle de l'enseignement*.
- Dallaire, C. et Roma, J. (2003), Entre la langue et la culture, l'identité francophone des jeunes en milieu minoritaire au Canada, dans Allard, R. (dir.) *Actes du colloque pancanadien sur la recherche en éducation en milieu francophone minoritaire : Bilan et perspectives*.
- Deniau, X. (2003/1983), *La Francophonie*, Paris, PUF, collection « Que sais-je ? ».
- Fédération de la jeunesse franco-ontarienne (FESFO)(2014), *Pour s'exprimer dans notre langue*. <https://fesfo.ca/pour-sexprimer-dans-notre-langue/>
- Gouvernement du Canada (2018), *Investir dans notre avenir 2018-2023, Plan d'action pour les langues officielles*. <https://www.canada.ca/content/dam/pch/documents/services/official-languages-bilingualism/official-languages-action-plan/plan-daction.pdf>

- Houle, R. & Corbeil, J.-P.(2017), *Projections linguistiques pour le Canada, 2011 à 2036*, Statistique Canada. <https://www150.statcan.gc.ca/n1/pub/89-657-x/89-657-x2017001-fra.htm>
- Morency, J.M., Caron-Malenfant, E. & MacIsaac, S.(2017), *Immigration et diversité : projections de la population du Canada et de ses régions*, Statistique Canada. <https://www150.statcan.gc.ca/n1/fr/catalogue/91-551-X>
- Statistique Canada (2017), *Le français, l'anglais et les minorités de langue officielle au Canada*. <https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2016/as-sa/98-200-x/2016011/98-200-x2016011-fra.pdf>
- Turcotte, M. (2019), Résultats du Recensement de 2016 : Le bilinguisme français-anglais chez les enfants et les jeunes au Canada, Statistique Canada. <https://www150.statcan.gc.ca/n1/pub/75-006-x/2019001/article/00014-fra.htm>
- Valdam, A., Auger, J. & Piton-Hatlen, D.(2005), *Le français en Amérique du Nord, état présent*, Presses de l'Université Laval.
- Vézina, M. & Houle, R. (2014). La transmission de la langue française au sein des familles exogames et endogames francophones au Canada. *Cahiers québécois de démographie*, 43 (2), pp.399–438.

\* 本稿で閲覧したURLはすべて2020年9月に最終確認した。